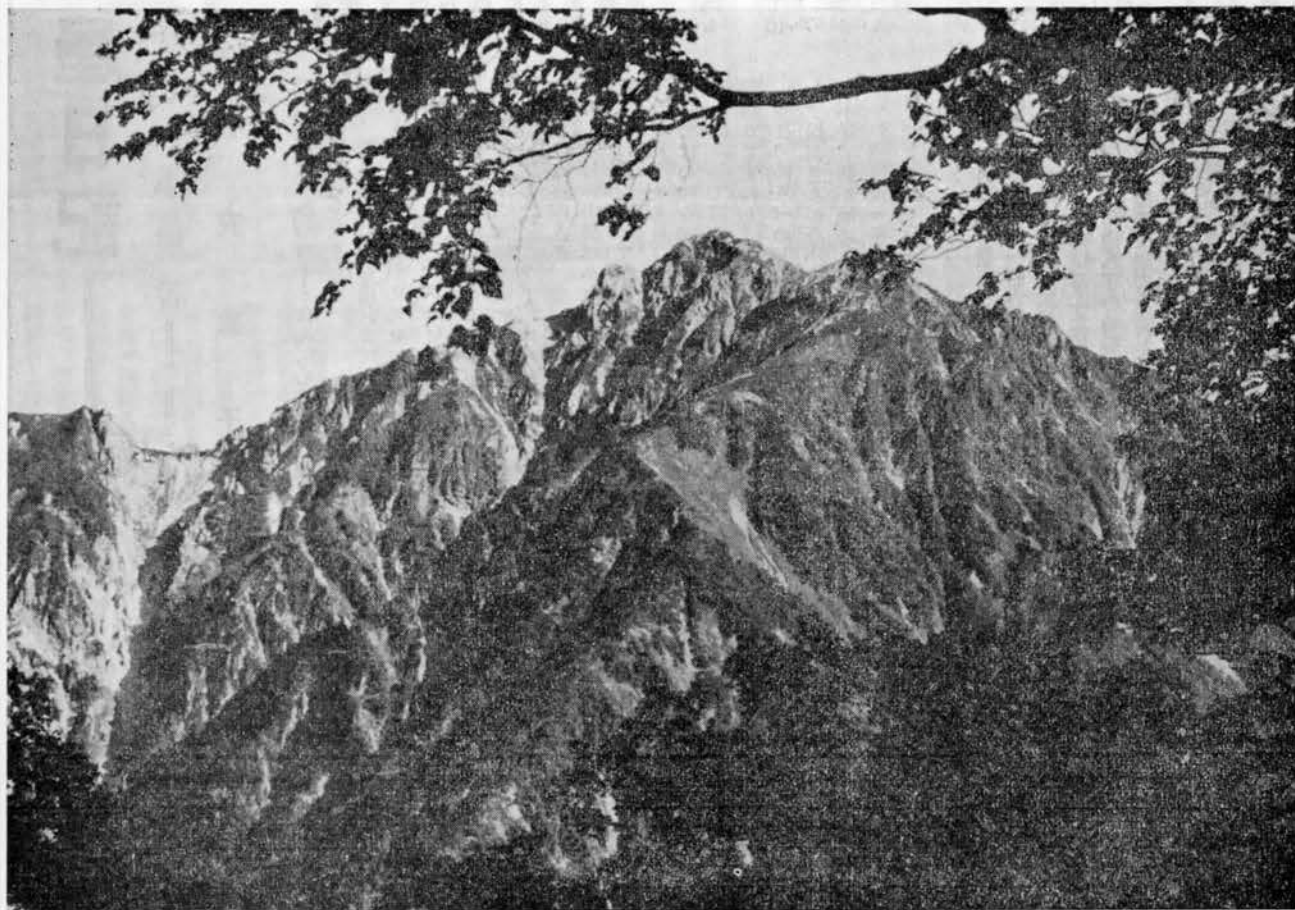


山と博物館

第10巻 第9号 1965年9月25日

大町山岳博物館



相変わらず衛生面の不備な山小屋

毎年夏山シーズンが終わると大町保健所から後立山連峰を中心とした北ア北部山小屋の衛生状況が公表される。ことしの結果は昨年より向上の跡が見られるが、期待されたほどよくなっているとはいえないとの結論が出た。平地と違って資材を運ぶのに多額の経費がかかる悪条件はあるにせよ、客さえくれば衛生面はどいうでもといった考え方が山小屋業者の間に相変わらず根強く残っているようだ。

ことし同保健所はシーズン前、業者を集め入山前に従業員の一っせいで検便をするよう呼びかけた。にもかかわらず全従業員の約三分の一に当たる五十五人もが未検便のまま入山してしまった。幸い例年発生する赤痢がことしは皆無でことなきをえたが、こんな調子では業者の衛生思想が極めて低いといわれても仕方がない。したがって環境衛生、食品衛生面でも寝具の保管場所がない、洗面所が不備調理室の整備ができていないなど多くの問題点が指摘された。これらのなかには金をかけなくても心構えひとつで改善できる事項がかなりあるだけに残念だ。

だいたい山小屋の経営は白馬を除いて競争相手がなく独占企業的な色彩が強い。初めから山小屋利用を計画している登山者は小屋の施設がいくら悪くても宿泊せざるをえない。そんなところに業者の改善意欲を低下させている大きな原因があると思う。

保健所の話だとこれが山小屋かと思われるほどきれいなところもあったという。ことしの夏山は冷夏、不況、長つゆがたたって、かかってない不振に見舞われたが、ある岳人にいわせると山岳雑誌の売れ行きは以前ほどでなくいままでのようなブームは期待できないのではないかとみている。この予測が当たるか当たらないか来年を見てみなければわからないとはいえず、より多くの登山者を山へひきつけるには施設のよい小屋がたくさんあるのが望ましいに決まっている。来年の努力に期待したい。

舟窪小屋日記

アルバイト小屋番

小沢敦子

8月1日 晴

山での感激は、いつも新鮮で強烈である。今日、船窪でのアルバイトの為に私は七倉を發った。稜線に出た時のあの身振いする様な感激ノ槍も薬師も、立山と針の木も四年前と同じだ。ハイマツの匂いが、靴底から伝わってくる岩道の感触が、……そんなもの全てが私の頭をやまという文字でいっぱいにした。市川さんというもう一人のアルバイト学生が私を出迎えてくれた。小屋の静けさも少しも変わらない、が鼻突八丁のつらきもやっぱり前と同じだ……。

8月9日 晴

この処山は晴天続きた。心配された台風も山には何の影響も無く去っていった。真黒に日焼けした若者が、小屋に着いて出されたいカルピスを一息に飲み干して、アリガトウ、と笑った。山を旅する人の表情が明るい。私は若い人の表情がこんなに美しいと感じた事はない。山でのこの人達は、何か素晴らしい輝きでいっぱいだ。

小屋での夕食は、山人参の味噌汁、サラダ岳ワラビ、そしてアザミの天プラである。来る人毎に、ウマイ、ウマイノと言う。私達はその聞いてホッとする。一番大切な役目を果たした様な気持になる。——がたくましい山男ばかり揃った日には、お釜の底を心配せねばならない事もある。

8月12日 風雨強し

低気圧の為、昨夕から風雨が激しくなった。昨晩は、風で小屋が揺れるたびに、吹き飛ん

でしまわないかしら……なんて心細い事を考えて何度も目を覚ました。

夕方、この風雨の中を南沢まで行った営林署の小林さんが30匹のイワナをおみやげに帰って来た。市川さんと、スゴイ、スゴイノを連発。ところが、雨の為かお客さんが一人しかいない。こんなはどうして食べようかと従業員2名、頭を痛めた(?)が、水場でこれを見たテントの人達四人が、食べるのを手伝いに来た。たくましい山男ばかり四人、この時ばかりと二人は腕を奮って、塩焼きしたり、煮たり天プラにしたり……。一同、山小屋ならではの味を満喫した。従業員、四人に向って曰く、明日は水汲みと薪割りですね……。

(翌日、ゆうべの冗談が本当になった。松沢さんが今小屋にいないので水不足、薪不足のところ、本当に助かった。現代っ子にしては律義な……イワナのおじさんが感心する事しきり。)

8月14日 晴

船窪小屋の日記を読むのも、また私達の一つの楽しみである。山を旅する人は、そこにいろんな思い出を記してゆく。鼻突八丁のつらかった事を、七倉岳の展望の素晴しかった事を。「アザミ天プラがおいしかった」と言う文句は、市川さんと私にとって、一番うれいものだが、「これで採算がとれるのか」と心配する

人までいる。それを見た中年のおじさんが、「この小屋の人は、本当に山が好きなんだな……」。しみじみした声でそう言った。今日こんな文句があった。「小屋に美人二名あり」思わず私はフキ出した。市川さんは確かにきれいだ、私は下にいると姉の引立役的存在で終っている。下に来てから友に話したところ、一笑にふざれてしまった。どうやら私に関する限り、美人という言葉、女性の少い山でしか通用せぬらしい……。

8月20日 晴

岳友に——

山はもうりんどうの青い花が咲きました。ななかまどの実も、もうすぐ色づくでしょう。山の秋は、もうすぐそこです。

朝8時、太陽はこんな小さな私にもったいない位の光をくれた。そのぬくみを背に感じながら山頂に立つ

(今晩は岳ワラビのおひたしです)



槍、薬師、立山と針の木ノ今、こんな静かな山に、私一人だけ。山と青い空とずっと上の白い雲だけだ。山頂で、私は思った。全ての自然は、今の私の為にあるみたい……。

静かな山と高山の植物の間で暮した20日間。小さな小屋と訪れる素朴な人達の間の20日。朝陽に輝く山々に歓喜し、夕焼けと山のシルエットにロマンを夢見た。そして夜は、青い月と満天の星くずに溜息をついた。ごっつい人が来て山旅を語り、小屋のおじさんの語る「山」を聞いた。暖いストーブを囲んで。

山の斜面をなめる様に登ってきた霧。自然はこんなに素早く姿を変える。8時半。視界5m。

山頂は幻想的な霧の世界だ。

もし、私の生涯に幸福という言葉を使う時が一度だけ与えられたとしたら。私は今の生活の為に使おうと思えます。2、3日したらこの美しい透明な日々を終えて山を下ります……。

8月22日 雨

——七倉岳山頂にて、私の全ての岳友に

ゆうべ、一組の素朴なカップルが、小屋に泊った。お客さんもないかったし、小屋番も私一人だったので、夜遅くまであちこちの山の話をしてくれた。そんな二人を見ながら、私も絶対に山の好きな人のお嫁に行く、と心に決めた。

台風の本土接近が無味だ。2時すぎ、登ってきた松沢さんと交替に山を下る、やっぱり少しうれい。小屋とおじさんと、将来は立派な猟犬になるはずのシロ、それからガストって見えないけれど廻り全ての山々、しばらくさようなら。また来ます。

鑑賞石によせて

平林照雄

最近の石ブームは驚くばかりで、各地で水石展が開かれ、愛好家の激増はめざましい。地質家と無縁とはいえないが、私どもが岩石や鉱物を愛好するのは大部趣を異にしている。水石愛好は芸術であって、自然科学ではないから、ハンマーを振りおろして、粘板岩だ緑泥石片岩だのと理屈をつけている我々は門外漢に属するかも知れない。しかしたゞ莫然と石を賞するばかりでなく、その石の生い立ちや本当の岩質を加味しながら鑑賞すると一層意義深いと思われる。趣味も石に至れば最高だと聞かぬが、神代の昔から愛石の情はあったらしい。室町時代の一四七三年創建といわれる京都の童安寺石庭は、細川勝元の命で、真相が作り、当時の神宗的な象徴主義芸術の代表作と賞されている。江戸時代の一八〇一年に奇石蒐集の産物である雲根志書いた木内重暁は、わざ／＼石亭と号し、この頃は大平の世相を反映して、好事家の中には弄石が流行した。すると現在の日本も大平ムードということになるのか。

鑑賞石は盆石、台石、水石と庭石に分けられ、いわゆる水石とは、小さい一塊の自然石の中に、大自然を象徴する風格を具備し、床の間に一つ据えて眺めるものである。庭石は大きめの巨礫に何等かの意味をもたせて組み合わせ、ある程度土に埋めて据えられるものである。水石の価値条件は、形(姿)、色あり、石質で、名石といわれるものは稀である。名石は由来石、自然石、造形石、抽象石、色彩石に分類され、形の上からは、遠山石、連山石、島嶼石、段石(土坡石)、荒磯石、瀉石、雨宿り石、洞門石、水溜り石、茅屋石および形石などと呼ばれる。連山石などは素人がみても、小さい一石の中に山岳を想わせる気のない気品が感じられる。鑑賞石は、古くから産地名をつけて呼ばれ、たとえば、加茂川石、掛斐川石、神居古潭石、小瀧石、那智黒石などがある。

鑑賞石を採すには、地質的な専門知識は大して必要がない。しかし地質の概要がわかっているれば能率的に求め得ると思われる。長野県の場合について案内すると、図に示したように、まず古生界地域が挙げられる。特に格子模様の部分は、古生界が変成作用をうけた結晶片岩類が分布している。また縦の点線は花崗岩が縞模様になった片麻岩類の地域である。古生界は梓川、奈良井川、木曾川上流に最も広く分布し、姫川流域や南佐久郡や赤石山地にも分布している。古生界の中には、鑑賞石となるのは、



粘板岩、硬砂岩、チャート、輝緑凝灰岩、石炭灰などで、これらの石の中に方解石や石英の白い脈が入ってくると更に趣を添えるようになる。結晶片岩は、緑、黒、赤などの縞模様があり、庭石として大きなものが運び出されている。図で黒く塗りつぶしてある蛇紋岩も緑、黄、濃緑の色彩に富み分布が限られている岩だけに貴重である。

岩石以外では、佐渡の赤玉(碧玉)やその他孔雀石のように色彩の鮮やかな鉱物、または梅花石(海百合)のような化石や珪化木、および温泉沈殿物の石灰華や珪華などがある。図で白く塗りつぶしてある部分の、長野県の中央部は、第三紀の比較的やわらかい砂岩、泥岩、礫岩で水石とはならない。アルプス側の花崗岩もろくろく趣がない。広く分布している安山岩は庭石としては大いに利用されている。

姫川流域は、下伊那地方と共に、水石や庭石の宝庫で、古生界の前述の各種岩石や結晶片岩および蛇紋岩があり、それらの岩石の中へ方解石、石英、碧玉、曹長石脈が多量に入ってきて複雑を極めていく。特に翡翠は、昭和十年小瀧川支流の土倉沢で発見され、考古学的価値と、宝石としての価値が高く評価されている。最近では姫川上流の松川や浦川でも翡翠を拾う人がある。なお姫川流域には赤玉、碧玉、黄玉などの碧玉も採集される。水石として価値条件を持つ礫は、川の downstreamでも上流でも不適当で、適度の侵食を受けた中流地域で求められるものである。

地質調査を犠牲にしてまで、珍しい石を探す風流さは、老境に達し私は持ち合わせていない。しかし水石はやはり自分で山谷を歩いて求めてこそ尊いはずのものである。また自然に穿たれた形こそ妙味があるといわれるので、加工したのでは不自然さが鼻についてしまう。名石は数十万から数百万だといわれるが買いためたり、売って儲けるような心掛では切角の風雅な趣味に味気なさを感じさせられる。

最近各地の小中学校で岩石園作りが盛んである。岩石の勉強や自然科学への目ばえを与えるのに大切であるが、徒らに経費をかけて遠方の奇石を集めるよりは、生活地域のもので有機的に配列し、後の管理を怠らないことの方が教育的である。経費の関係では、学校近くの河原の石を据えても目的は達せられる。無生の一塊の石塊に大自然をしのび、生命の所在を求めたい心は貴い。旅先でポケットに一つしのばせて来た海岸や河の石ころのコレクションも、整理すればよい記念になる。

石ブームのある地へ行った時、おやじさんが宝物のように取り出す石を、非難めいた横目でながめていたおばさんの、二人の対照的な表情が今でも折にふれて思い出される。

長野県教育センター

山の詩歌碑

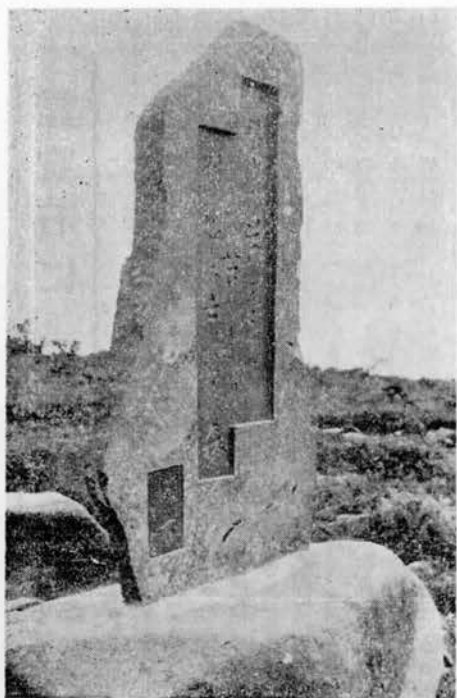
福沢武一

川井静子歌碑

—美ヶ原高原物見石山—

松本でバスに乗ったのは八時半。霞山荘の手前で山路にかかる。山腹のつづら折。たちまち高度を増し、入山辺の峽が足下になる。やがてヤナギラン、松虫草、オミナエシなど咲いた草地をぬって登り続ける。テレビ塔が右手に見えた。程なく終点下車。岩層をふんで尾根をのぼる。左右の草地はグンナイフウロが花盛り。頂のテレビ塔の下で一息いれ、美ノ塔に向って一谷越える。くぼ地に咲いているのはオタカラコウの群落。美ノ塔のまわりにはハイカーがむれいている。そこから山本小屋へで、歌碑の所在地をたずねる。小屋の若者が表へでて指さし示してくれる。そこは尾根つづきで、いまちょうど陽のこぼれた物見石山の先端。

小高みをのぼりつづつする。岩層を半ば埋めている草地は花で一ぱい。一番多いのは松虫草。苔桃の実が赤く色づき初めている。



正十二年、川井氏

とんでいるのは小さなトンボ。午後一時、目的地に到着。こっち向きに立つ立っている石、——それが歌碑。このあたりには人影はほとんどない。近づいて碑面をのぞく。厚さ一五センチほどの白っぽい板石高さ一七〇、幅八〇センチ前後の面に彫りこみをし、そこだけ黒く磨いて一歌が刻まれている。それは、

春浅し苔に坐りて苔むしり別れ悲しみ去り
がたし森 閑古 (清山書)

碑石に風情のないことが惜しまれる。も一つ、一歌は桔梗原で作られたもので、こうした山上に建てるのがどうかと思われる点。それはあまりとがめまい。生れて、やがて死んでいった自村の地籍内から碑は歌人の心となって桔梗原に遠く目をやっていたのだからさらにも一つ、自筆でないことも心残りの一つだ。

静子は旧姓中原。明治二三年の生れ。四二年、松本女子師範卒業と共に桔梗原の広丘小学校へ赴任。校長島木赤彦に師事し、閑古の号でアララギに投稿。赤彦との交渉がただならぬ深さだったことは遺稿「桔梗原の赤彦」(昭和三二年)、「丹の花」(昭和三八年)によって知られる。歌碑の一歌は、森に対して別れを悲しんだのではない。赤彦その人との別れがなによりも心いたかったのだ。赤彦が桔梗原を去ったのは明治四四年。主題歌はその直後の作。静子は翌年同地を去り、直後に発病、入院転地、帰省。赤彦との交渉が絶え絶えに続いた後、大

に嫁した。一五年、赤彦他界と共に歌壇から遠ざかった。昭和六年、夫君死去。生活難の時代が続いた。その中で前記遺稿をまとめたその出版を見ずに三一年にこの世を去った。思えば涙なきをえない一生だった。同郷の人々が彼女をあわれんで碑を建て、碑陰の文を次のように結んでいる。

：思い出の桔梗ヶ原を望む美ヶ原に碑を建つ
昭和三八年文化の日

目的を果たした僕は尾根はなへでて草に腰をおろした。涼しい風が吹きほって来た。足もと小泉の深い裏峽。その先は和田峠線の谷に合している。も一つ北隣の峽が静子の生地。目には映らないその峽の村に思いをはせた。それは「涙の谷間」に思われた。

秋のキジバトの巣

長 沢 修 介

台風が去ってすっきりと晴れた空は、どこまでも澄んで青く、遠く山々にはもう初雪が来て真白な姿になっている。

山野を訪れてみても、もう鳥達は歌を忘れてしまい、下敷で時折、虫と間違えような声でチャ、チャとウグイスが鳴き、わずかに数羽のホホジロガスキの原から飛び立つのみで引き込まれるような静けさの中で淋しいコウロギの声が一層の静けさを添えていた。

初夏の盛大な歌声のコーラスが思い出され一まつ淋しさを感じながら歩いていたら突然バタ、バタと頭上からキジバトが飛び立った。ふり仰くと3m位の松の枝に巣があつた。唐松や松などの枯れた小枝を重ねて作った粗末な巣は下からみると卵が見える。今頃の季節にと思つて木に登ってみると、抱卵を始めてまだ二三日位の卵が二つあつた。キジバトは蕃殖期が長く四月〜七月頃迄の産卵が普通で、八月の下旬にうぶ毛のぬけてしまわない雛を見たことはあるが、こんなに遅い時期のものは稀であった。この卵が無事に孵つたら、その頃は紅



葉の真中で、雛は紅葉の世界に生れ出るだろう。しかし朝夕の寒さに耐えられるだろうか。巢立の頃は木々の葉も落ちて落葉でカサ、コソの秋になってしまふ。そしたら無事に成育し、又きびしい冬の欠乏期を乗り切ることが出来るだろうか。季節外れのキジバトの卵に心配の念はつきなかつた。

表紙説明

舟窪小屋より針ノ木岳を望む

撮影 千葉 彬 司

山と博物館 第10巻第9号

一九六五年九月二十五日発行

発行所 長野県大町市T.F.I.(大町)二一一

大町山岳博物館

印刷所 大町市下仲町

大糸タイムス印刷部